

# Gion Festival Takayama Float Reconstruction Project 4: Design of Suso-maku (Bottom Hanging)

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2022-03-23<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 滝口, 洋子, 吉田, 雅子, 日下部, 雅生, 川嶋, 渉,<br>Takiguchi, Yoko, Yoshida, Masako, Kusakabe, Masao,<br>Kawashima, Wataru<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/395">https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/395</a>  |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 祇園祭の鷹山の復興プロジェクト 4

### — 裾幕のデザイン

#### Gion Festival Takayama Float Reconstruction Project 4: Design of *Suso-maku* (Bottom Hanging)

*Yoko Takiguchi, Masako Yoshida, Masao Kusakabe, Wataru Kawashima*

滝口 洋子、吉田 雅子、日下部雅生、川嶋 渉

#### はじめに

江戸時代に損壊した祇園祭の鷹山を復興させるために、京都市立芸術大学の学生と教員は鷹山の復興計画に参加し、数年をかけて鷹山の祭礼衣裳、裾幕（すそまく）、小物のデザインを制作している。本稿では2020年度のプロジェクトの概要にふれたのち、2021年度のプロジェクトに関して詳しく報告する。

#### I 2020年度プロジェクトの概要

2020年度は思いがけずコロナ・ウイルスが蔓延した。取り急ぎ授業をリモートに切り替えなければならず、急なりモートを通して鷹山保存会とコミュニケーションを取って授業を進行することは困難だった。そのため、本来この年は裾幕をデザインすることになっていたが、綿密なコミュニケーションや複雑な工程を必要とする裾幕ではなく、鷹山を支援する小物類をデザインすることに急遽内容を変更した。小物類のデザインは学生が個人個人で行いやすく、グループワークを必要とする裾幕に比べるとリモートで指導しやすいからである。

2020年度は学部生17名、修士課程の学生1名の計18名がリモート授業に参加し、鷹山に関連するプロモーションツールとしての小物類のデザインを考えた。そして、それらの中から以下のデザインが鷹山保存会によって選ばれた。

(1) 鷹山の立版古（佐々木水音、美術科3回生）；(2) 鷹山絵巻Tシャツ（藤澤恵、美術科3回生）；(3) 鷹山涼感タオル（桐畑百花、デザイン科3回生）；(4) ご当地サイダー（谷井皐月、工芸科3回生）；(5) 鷹山箸置き（松久碧花、工芸科3回生）；(6) 鷹山マスク（山田歩実、総合芸術学科3回生）；(7) 鷹山ペンライト（蔡煜桐、修士

課程絵画専攻1回生）。このうち(1)(2)(3)(5)(6)は現物モデルの制作が進行している。

#### II 2021年度プロジェクト

##### (1) プロジェクトの概要

2021年度はコロナ・ウイルス蔓延の2年目にあたり、まだウイルスの終息にはほど遠い。だが、さらに来年に延期すると鷹山の巡行復帰に間に合わなくなることや、リモート授業にもある程度慣れてきたことなどから、裾幕のデザインを遂行することにした。

2021年度の授業に参加したのは学部生22名、修士課程の学生2名の計24名で、4つの班に分かれて作業を行った。授業では祭礼や裾幕の歴史的検証をまず行い、それに基づいてデザインを起こした。歴史的検証の部分は吉田雅子が主体となり、デザイン制作の部分は滝口洋子、日下部雅生、川嶋渉が主体となって指導した。コロナが広がるまでは、鷹山の町内に残る呉服商の旧家や宵山の飾りつけなどを見学したが、2020年、21年はコロナのために見学は行うことができなかった。

2021年の授業は、主に以下の内容から構成されている。

- ・ 祇園祭・鷹山・裾幕に関する調査
- ・ 木村幾次郎氏（万足屋きむら御当主）によるリモート・レクチャー
- ・ 山田純司氏（鷹山保存会理事長）によるリモート・レクチャー
- ・ ラフ・デザインの制作と鷹山へのリモート・プレゼンテーション（1回目）
- ・ デザインの修正と展開
- ・ 鷹山へのリモート・プレゼンテーション（2回目）と鷹山によるデザインの選出

・選出デザインの修正

#### (a) 祇園祭・鷹山・裾幕に関する調査

5月の授業において、班ごとにテーマを設定して祇園祭・鷹山・裾幕に関して調べ物を行った。各班の調査の主題は以下である。前祭（さきまつり）における山鉦の裾幕の現状（1班）、後祭（あとまつり）における山鉦の裾幕の現状（2班）、祇園祭の歴史（3班）、絵画に描かれた裾幕（4班）。各班は調査した内容をプレゼンテーションし、デザイン出しの基礎情報として、それまで班ごとに調べていた内容を全員で共有した。この調査内容に関しては、追って詳述する。

#### (b) 木村幾次郎氏によるリモート・レクチャー

木村幾次郎氏は万足屋きむらの三代目の御当主で、祇園祭山鉦連合会の理事長をされている。代々悉皆業を営まれ、御自身の町内である長刀鉦の品々の詠えに長年尽力されてきた。長刀鉦は周知の通り祇園祭の山鉦巡行を先導する籤（くじ）取らずの鉦で、生きた稚児を今でも乗せる唯一の鉦である。長刀鉦の中には祇園祭の様々な伝統が息づいており、その品々の詠えを担当されてきた木村氏は山鉦町の祭礼や染織品に関する奥深い見識を有されている。そこで5月6日に祇園祭の裾幕に関してリモートでレクチャーしていただき、複数の事例に関して解説いただいた。

#### (c) 山田純司氏によるリモート・レクチャー

5月13日、鷹山保存会の理事長である山田純司氏に、リモートでレクチャーいただいた。山田氏は鷹山の巡行復帰に向けて各種の幕類がどのように制作されているかを話された上で、裾幕のデザイン条件に関して説明された。鷹山保存会と芸大はすでに何年も共同プロジェクトを行っており、その様子から判断して、裾幕は学生に自由にデザインしてほしいと山田理事長は考えられた。そのため以下のデザイン条件が提示された。

#### 裾幕のデザイン条件

- ・前・後・左・右の裾幕が必要で、これらはひとつながりの幕とはせず、個別の4枚の幕とする。
- ・前・後の裾幕の画面の大きさは200x40cm、左右の裾幕の画面の大きさは204x92cmとする。
- ・デザインと色数は自由で、鷹山らしい、裾幕にふさわしいデザインを自由に考えてほしい。

#### (d) ラフ・デザインの制作と鷹山へのプレゼンテーション（1回目）

鷹山から提示されたデザイン条件に従いながら、班ご

とにデザインのラフスケッチをとりまとめ、6月17日に第1回目の鷹山へのリモート・プレゼンテーションを行った。鷹山保存会の方々は鷹山の町内の歴史的建造物であるちおん舎に参集され、リモートに参加されて、学生が提案したデザインに関してさまざまな御助言を下された。学生のデザインは鷹をモチーフにしたものや、波などをモチーフにしたものが多かった。これに対して、鷹山保存会から、別の主題、たとえば「鷹狩りの野」を主題としたものも、できるなら次回提出してほしいという旨の発言があった。

#### (e) デザインの修正と展開

鷹山保存会からの様々な御助言に基づいて、学生はデザインを修正したり、新たなデザインを考えようと試みた。だが実際のところ「鷹狩りの野」という主題は、学生にとってはかなりの難題だった。インターネットなどでその情景をいろいろ調べてはみたものの、なかなかイメージが湧かず、うまくデザインを考えられなかった。そのようにしていたところ、保存会理事の西村吉右衛門氏から、たとえば伝統文様の「露芝」のような感じでもよいという御助言を受けた。そこで教員は「露芝」の様々なバリエーションをリモートで学生に提供し、さらにアイデアをふくらませるように助言した。

#### (f) 鷹山へのプレゼンテーション（2回目）と鷹山によるデザインの選定

8月5日、学生はリモートで鷹山保存会に正式なプレゼンテーションを行った。鷹山理事会の方々はちおん舎に参集してプレゼンテーションに参加され、プレゼンテーション終了後に各班のデザインを詳細に検討され、その中から採用案を選定された。

その結果、風になびく草をモチーフにした案が採用された。このデザインを制作したのは2班で、この班は以下の学生から構成されている。佐藤天音（版画専攻3回生）、北村花（油画専攻3回生）、矢作玲乃亜（漆工専攻3回生）、中村美月（染織専攻3回生）、増川知乃（日本画専攻4回生）、小山内瑞恵（修士課程工芸専攻1回生）。

#### (g) 選出デザインの修正

コロナが猛威を振るったため、デザインの修正はそれが下火になった時期（授業が終わった時期）に、教員と選出デザインに関係する学生によって少しづつ行われた。選出されたデザインとその修正に関する詳細は、追ってまとめて詳述する。

## (2) 裾幕に関する調査

以上、2021年度プロジェクトの概要を記したので、次にその詳細をとりまとめてゆきたい。まずは裾幕の調査だが、これは主に3つに分けられる。第一は祇園祭の山鉦全般を対象とし、歴史的な絵画資料に描かれた裾幕のありようを調べるもの、第二は鷹山を対象とし、文献史料と絵画資料をもとにその裾幕を調べるもの、第三は現在祇園祭の山鉦で用いられている裾幕を調べるものである。以下順に、その詳細を述べてゆく。

### (a) 祇園祭の山鉦の裾幕に関する調査

祇園祭の山鉦の前後左右には、水引（みずひき）、前掛（まえかけ）、胴掛（どうかけ）、後掛（うしろがけ）、見送（みおくり）と称される装飾的な懸装品が掛けられる。2021年度プロジェクトのデザイン対象となったのは、これらの懸装品の下に掛けられる裾幕である。古い時代には装飾的な掛物の形態が今のように整えられておらず、当時舶載された様々な大きさの染織品が掛けられた。そのため、それらの掛物の下部に木組があまり露呈しないように裾幕が掛けられていたことが、後述する絵画資料からうかがわれる。このような裾幕はいつ頃から使われていたのであろうか、そしてどのようなデザインが使われてきたのであろうか。それを把握するために、絵画資料に裾幕が描かれている様子を4班の学生が調べたところ、以下が明らかになった。

祇園御霊会が描かれている古い作例として、平安時代に後白河院が発注した「年中行事絵巻」があった。この原本は近世初期の頃に焼失し、現在は江戸時代に作られた模本が部分的に残っている<sup>1</sup>。だが、この模本には神輿（みこし）の行列は描かれているものの、山鉦の描写は

残っていない。

次に、御霊会の山鉦巡行が描かれたものとして、「月次祭礼図」をあげたい。この原本は室町時代に土佐派の画家が描いた屏風と推定されているが、原本は江戸時代に失われており、現在はその一部を写した江戸時代の模本（東京国立博物館蔵）が残っている<sup>2</sup>。描かれている祭礼品や描写表現の特徴から、原本となった作は応仁の乱以前の15世紀前半にさかのぼるものとされている<sup>3</sup>。この模本の中に、裾幕とおぼしきものがつく山鉦が2基みられる。そのうち1基の鉦には、丸に三つ盛り亀甲花菱が白地に黒で大きく配された幕が裾の部分についている。もう1基の昇山（かきやま）<sup>4</sup>（図1）には、白地に黒の七宝花菱が配された幕が、裾の部分に描かれている<sup>5</sup>。ただし、これらの山鉦においては上部に掛けられた幕の丈がやや短いため、これらは裾幕ではなく、胴幕<sup>6</sup>の可能性もあるかもしれない。

その後の16世紀以降の絵画資料の中にも、裾幕様の幕類が散見される。この当時の鉦においては、前後左右につるされた掛物の画面構成と、裾幕の画面構成が異なるため、鉦の場合は裾幕が描かれているかどうか比較的容易に判別することができる。これに対して、昇山などは、細長い幕を前後左右にぐるりと回す形式のものが多く、一番下に掛かっている幕が胴幕なのか、あるいは裾幕なのか判別が難しいものもある。また裾幕であると判断できても、特別なデザインが施されていない白無地のものが多く見受けられる。そこで以下、明らかに裾幕と判断でき、なおかつ文様がある例をいくつかひろいあげてゆく。

「洛中洛外図屏風」（歴博甲本）（国立歴史民俗博物館蔵）は、町田本、三条家本とも称され、洛中洛外図の屏風の



図1 月次祭礼図模本（部分）、東京国立博物館蔵

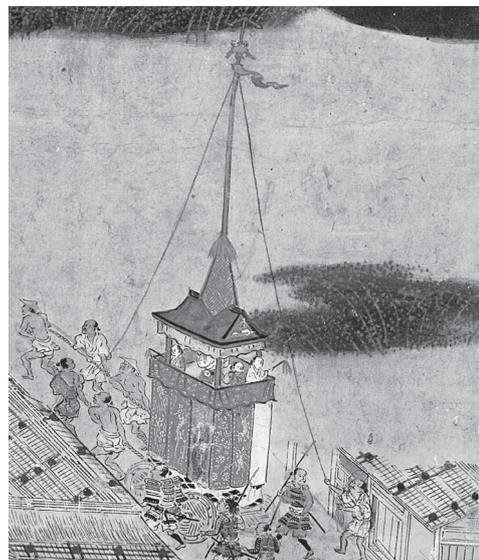


図2 放下鉦、洛中洛外図屏風（部分）、歴博甲本、国立歴史民俗博物館蔵



图3 鶏鉦、日吉山王・祇園祭礼図屏風（部分）、サントリー美術館蔵



图4 岩戸山、洛中洛外図屏風（部分）、上杉本、米沢市上杉博物館所蔵

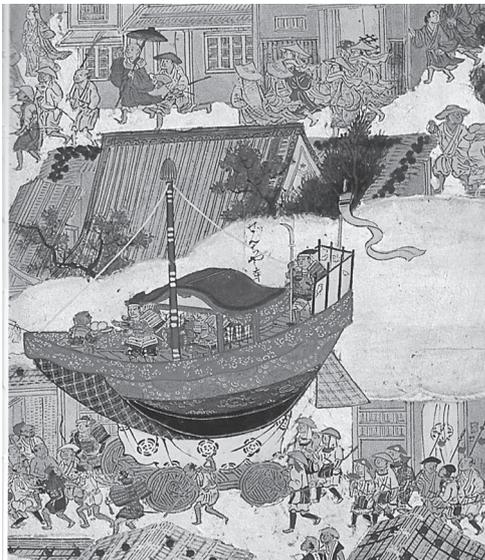


图5 船鉦、洛中洛外図屏風（部分）、上杉本、米沢市上杉博物館所蔵



图6 函谷鉦、祇園祭礼図巻（部分）、横山華山筆、個人蔵



图7 南観音山、祇園祭礼図巻（部分）、横山華山筆、個人蔵

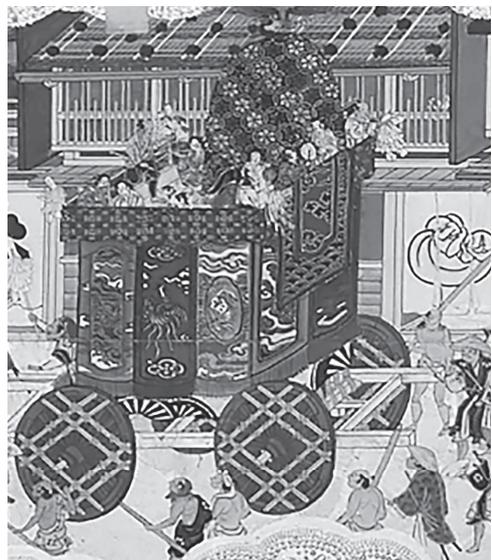


图8 鷹山、祇園祭礼図屏風（部分）、京都国立博物館蔵

中で最も古い。16世紀前半の作で、大永5-天文5年(1525-36)頃の京都を描いたものとされている<sup>7</sup>。この屏風には祇園会の山鉦巡行が描かれており、放下鉦(図2)に裾幕がついている<sup>8</sup>。それは白地で、黒い四菱文様が大きく配されている

「日吉山王・祇園祭礼図屏風」(サントリー美術館蔵)は、土佐光茂による16世紀半ばの作と推定されている<sup>9</sup>。この作の鶏鉦(図3)に裾幕が描かれており、白の鳥文様が紺地に配されている<sup>10</sup>。

さらに、「洛中洛外図屏風」(上杉本)(米沢市上杉博物館蔵)にも、複数の裾幕がみられる。狩野永徳筆のこの屏風は、天正2年(1574)に織田信長が上杉謙信に贈ったものと推定され、景観年代は永禄初年頃(1560年前後)とされている<sup>11</sup>。この祇園会の描写の中に、以下の裾幕を確認することができる。長刀鉦の裾幕は白地で、上の掛物に隠れて文様の下の部分しか見えないものの、おそらく八坂神社の御神紋の一つである木瓜紋と思われる<sup>12</sup>。岩戸山(図4)の裾幕は、白地に松皮菱の文様である<sup>13</sup>。船鉦(図5)の裾幕にも、やはり白地に八坂神社の御神紋の木瓜紋(五瓜に唐花紋)が表されている<sup>14</sup>。

次に、17世紀の作には、以下の裾幕の例が見うけられる。祇園祭の八幡山保存会が所有する「祇園祭礼図屏風」は、明暦期(1655-58)の海北友雪の作である。この屏風の大船鉦には、白地に浅葱色の波文様の裾幕が描かれている<sup>15</sup>。注目されるのは、京都国立博物館に所蔵されている「祇園祭礼図屏風」で、この中に鷹山の裾幕が描写されている。この鷹山の裾幕に関しては、追って詳述することにする。

以上見て来たように、16-17世紀の絵画資料に描かれた祇園祭の山鉦の裾幕の大半は白の無地だが、中には文様があるものも散見される。それらは今日で言うところの家紋に類するような単純化された文様(四菱、鳥、木瓜、松皮菱、波など)で、画面に大きく配されるという特徴がある。使用する地色は白で、文様は黒や紺が大半だが、浅葱色のものもある。そしてまれに、紺地に白の文様を配するものもある。

これに次ぐ18世紀の作例はあまり調べることができなかったが、その後の作として、横山華山筆の「祇園祭礼図巻」(個人蔵)を挙げたい。この図巻は天保6-8年(1835-37)の作と推定されている<sup>16</sup>。

この図巻では函谷鉦、月鉦、船鉦、南観音山の裾幕が描かれており、そのうち月鉦のものは無地で特別な意匠は配されていない。だが、函谷鉦、南観音山、船鉦のものには意匠が用いられている<sup>17</sup>。大型の山鉦である函谷鉦(図6)と南観音山(図7)の裾幕は、ともに鯨幕(くじらまく)である。鯨幕とは、白と黒の布を一幅おきに縫い合わせた幔幕をいい、巡行しているこの種の幕を遠

方から見ると、それは太い縦縞文様に見える。

このうち函谷鉦は、天明の大火(1788年)以降長らく鉦を再建できず、天保10年(1839)になってようやく鉦を再建することができた<sup>18</sup>。この図巻が描かれた天保6-8年には函谷鉦はまだ再建されていなかったため、華山は先行作品を参照したり実地調査などを行ってこの鉦を描いたと推察されている<sup>19</sup>。これらの山鉦に対して、波の上をゆく船を模った船鉦の裾幕には、船が進むにつれて現れる波しぶきが文様化されている。

なお、本プロジェクトの対象である鷹山もこの図巻に描かれているが、残念なことにこの図巻では鷹山の上部しか画面に入っておらず、裾幕は描かれていない。周知の通り鷹山は文政9年(1826)の台風によって損壊を被り、翌年以降巡行から退いて休山(やすみやま)となり、今日に至っている。従って、この図巻が描かれた天保6-8年には、鷹山は巡行に参加していなかった。そのため、華山はやはり先行作品を参照するなどしてここに鷹山を描いたものと推測されている<sup>20</sup>。

さて、鷹山を復興させる基本設計では、鷹山が休山になる直前の19世紀前半の姿を復元することが基本方針として定められた<sup>21</sup>。このことを念頭におくと、華山の図巻にみるように19世紀前半の作において、函谷鉦や南観音山といった大型の鉦や曳山(ひきやま)<sup>22</sup>の裾幕として白黒の鯨幕が描かれていることは、特に留意すべきであろう。かつて鷹山は大型の曳山であったため、鷹山の裾幕をデザインするにあたっては、このような19世紀前半の大型の鉦や曳山の裾幕がデザインの参考になるからである。

## (b) 鷹山の裾幕に関する調査

以上、祇園祭全般における古い時代の裾幕の描写をみてきたが、鷹山の裾幕デザインを起こすにあたっては、やはり鷹山の裾幕がかつてどのようなものであったかを調べる必要がある。鷹山の文献史料と絵画資料はすでに京都市文化財保護課によって調査され、『放鷹：祇園祭鷹山復興のための基本計画』にまとめて掲載されている<sup>23</sup>。これらの資料に目を通した結果、以下が明らかになった。

### (i) 鷹山に関する文献史料

鷹山に関する文献史料は少なくとも29件あり、年代が判明するものは永禄3年(1560)の『祇園会山鉦事』から文化6年(1809)の『祇園会神事当家式目』までに至る<sup>24</sup>。これらにおける鷹山に関する記載にすべて目を通したが、鷹山の裾幕に関する表記は見当たらなかった。文献史料からは、鷹山の裾幕の状況は浮かび上がって来ない。

## (ii) 鷹山に関する絵画資料

鷹山が描かれた江戸期までの絵画は少なくとも20件あり、それらは室町時代(16世紀)の「日吉山王・祇園祭礼図屏風」から、江戸時代の弘化4-嘉永5年(1847-52)の「京都祇園祭礼鉾之図」に及ぶ<sup>25</sup>。これらの絵画に描かれた鷹山の図は、その大半が『放鷹』に掲載されている。また、『放鷹』に掲載されていない3点に関しては、京都市文化財保護課の山下絵美氏に確認を取った。その結果、これらのうち1件の絵画に鷹山の裾幕が描かれていることが明らかになった。

それは、寛永期(1624-43)の前半の制作とされる「祇園祭礼図屏風」(京都国立博物館蔵)である<sup>26</sup>。この屏風の鷹山の描写(図8)を見ると、大きな車輪が断ち切れたような文様の幕が裾に配されている。この文様は片輪車と通称されるもので、牛車の車輪が乾燥して割れるのを防ぐために水に漬けた情景を描いたものとされている。

だが、最近の研究でこの文様に対して新たな解釈が提示されており、上田祥悟氏は以下の旨を指摘している<sup>27</sup>。流水片輪車文の意匠は、乾燥を防ぐために車輪を川の水に浸けた平安時代後期の実景に基づくものであるという説が昭和7年から11年の間に提出されたが、漆塗りの牛車の車輪を長時間水に浸けることは漆の塗膜を損なうため実際には行われなかった可能性が高く、史料上もそのような行為がなされたことを裏付けることは難しい。絵画や工芸の現存作例、和歌や物語などの文芸作品、経典などを詳細に検証すると、片輪車文は和歌や葦手を通じて平安時代においては「破車」(壊れて遺棄された車輪)の実景から派生したものであることがわかる。さらにこの種の車輪の意匠は、蓮花や法輪を意識して選択された可能性が高く、平安時代には仏教的主題の表象として用いられていた。

以上見てきたように寛永年間前半(1624-44)の絵画作品において、鷹山の裾幕として片輪車が描かれていたことが確認された。この文様は壊れて遺棄された車輪の実景から派生し、平安時代には仏教的主題の表象として用いられていた可能性が高いものである。

## (c) 祇園祭で今日用いられている裾幕の調査

このように歴史上の裾幕の表現を洗い出してきたが、裾幕のデザインを起すためには、歴史上の事例だけでなく現在用いられている裾幕を調査することも重要である。そこで、現在祇園祭の巡行に用いられている裾幕の事例を、1班と2班の学生が調査した。

祇園祭は前祭と後祭に大きく分けられる<sup>28</sup>。前祭は1班が担当し、木村幾次郎氏を通して祇園祭山鉾連合会が提供下だった巡行の画像と、インターネットに掲載されて

いる2019年の巡行の画像<sup>29</sup>を基に、裾幕の現在の状況を調べた。後祭は2班が担当し、教員の吉田雅子が2019年に撮影した巡行の動画を基に調査をまとめた。調査対象は計33基の山鉾である<sup>30</sup>。

各班は巡行の画像から裾幕の部分を抜き出して、それらをもとに以下の点を調べて書き起こした。山鉾名、巡行年、裾幕に用いられているモチーフとその意味、色彩(地色とモチーフの色)。そしてそれらをまとめて考察した結果、以下の点が浮かび上がった。

現在裾幕に使われているモチーフを洗い出して羅列してみると、前祭には以下が用いられている。縦縞(鯨幕)3件、縦縞(鯨幕)に三巴文様と五瓜に唐花文様(八坂神社の御神紋)2件、縦縞(鯨幕)に五瓜に唐花文様(八坂神社の御神紋)、縦縞(鯨幕)に秋草、三巴文様と五瓜に唐花文様(八坂神社の御神紋)と籠目文様、三巴文様と五瓜に唐花文様(八坂神社の御神紋)と輪宝紋、波文様4件、青海波崩し、長刀鉾の「長」の字、蟻螂山の「蟻」の字と露芝、木賊と青海波、琴柱文様、梅鉢文様、笹文様、市松文様。また、後祭には以下が見られる。縦縞(鯨幕)、縦縞(鯨幕)に亀甲文様(六角)、縦縞(鯨幕)に雲取亀甲と雲取小葵、波濤文様2件、青海波、波文様と草文様、黒主山の「黒」の字、雲立涌。

これらのモチーフやデザインには、いくつかの傾向がある。まず、山鉾の飾り物やその物語に由来するモチーフが多く用いられている。たとえば、天神(菅原道真)を祀る油天神山は、裾幕のモチーフに道真にちなんだ星梅鉢紋を用いている(図9)。また、琴の名人の伯牙にちなんだ伯牙山は、琴の音を調整する琴柱(ことじ)を裾幕のモチーフとしている(図10)。

町名の文字の一つを用いる例もある。中国故事の蟻螂の斧(とうろうのおの)を主題とする蟻螂山は、蟻螂(=カマキリ)の「蟻」の字とカマキリがひそむ草むらを用いて、裾幕をデザインしている(図11)。長刀鉾が「長」の字、黒主山が「黒」の字を配するのも、この種の例である。

さらに、青海波、波濤文様など、水や波にちなんだ図案も多く用いられている。その典型は船鉾で、神功皇后が船で朝鮮に向かう説話を主題とするこの鉾は、鉾本体が船の形をしており、船の下に立つ波しぶきを裾幕に表現している(図12)。

なお裾幕は、胴掛や水引に比べるとシンプルなデザインが多い<sup>31</sup>。その典型は鯨幕(縦縞)で、放下鉾、南観音山、白楽天山、八幡山がこれにあたる。さらに鯨幕に別のモチーフを組み合わせるものもある。たとえば、函谷鉾(図13)の裾幕は、鯨幕を基本とし、その中に八坂神社の御神紋(三巴文様と五瓜に唐花文様)を組み込んでいる。また、北観音山(図14)の裾幕は、北観音山の

境界を象徴する六角を鯨幕に組み込んでいる<sup>32</sup>。

これらの裾幕に使われている色彩を地色別にまとめて羅列してみると、以下ようになる<sup>33</sup>。紺地に白（5件）白地に紺（4件）；白地に黒（2件）白地に紺と金色；白地に浅葱色；白地に水色；白地に黒と緑；白地に赤；浅葱地に白（2件）；青地に白；薄緑地に濃緑；赤地に白（3件）；緑地に白；灰色地に白；黒地に白；黒地に赤。また、鯨幕のように地と図の関係がないものもあり、それらに

は以下の色使いが用いられている。白と紺；白と紺と黄土色；白と黒；白と赤と緑；紺と緑；緑と紫と橙。

これらの色彩の傾向は、以下のようにまとめることができる。前掛・胴掛・水引は多色を用いた派手なデザインが多いのに対し、裾幕は色数が少なく、白に青系統の色彩や黒を組み合わせるものが多い。特に、浅葱色、水色、紺など、青系統の色彩が多く用いられる傾向がある。このことは、これらの裾幕の素材である麻や綿に染め付



図9 現在の油天神山の裾幕



図10 現在の伯牙山の裾幕



図11 現在の蟠螂山の裾幕

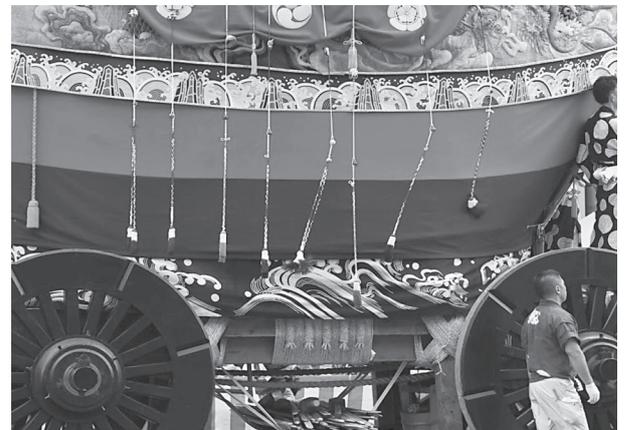


図12 現在の船鉾の裾幕



図13 現在の函谷鉾の裾幕



図14 現在の北観音山の裾幕

けやすい藍染が、歴史的に多く用いられてきたことと関係しているだろう。鉾の上部の懸装品は緋色の羅紗で縁取られるため、その赤系統の色と、裾幕の青系統の色が好対照をなすように構成されている。また、裾幕の地色が濃色の場合は、鉾全体が締まって見えるという色彩効果がある。

### (3) 選出デザインの修正

以上の調査の結果をくみながら、学生は様々なデザインを行った。そして先述したとおり、鷹山保存会の方々は2班のデザイン(図15)を選ばれた。鷹山の御神体の主題とされている鷹狩を意識し、草原における鷹狩の風情が感じられるように、風にゆれる草のモチーフを取り入れたデザインである。2種類の草のモチーフを連続させて、斜め上方に向かう躍動感を表出することが意図されている。



図15 オリジナルのデザイン案



図16 筆書きに置き換えた修正案



図17 筆書きの様子

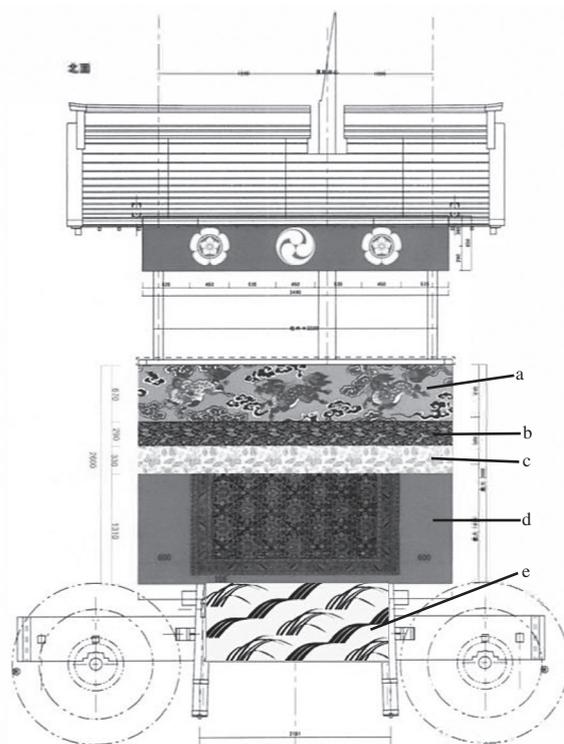


図18 オリジナル案を鷹山に掛けた想定図

も目立ってしまうのである。b,c,d はリピートの一単位となるモチーフが比較的小さく、また背景とモチーフの明度や彩度の差が小さいため、遠くから見ると文様がさほど目立たない。これらとは対照的に、この裾幕のデザインは背景の白地に紺色の大きなモチーフが強いコントラストをもって浮き上がり、モチーフが斜め上に向かって躍動するかのように見える。そのため遠くから鷹山全体を見た場合、やや安定感に欠け、本来目が行くべき胴幕や水引に目が行かず、裾幕に胴幕や水引が食われてしまうという問題が生じる。

ここで思い出さなければならないのは、裾幕の基本的機能とはいったい何かということである。そもそも裾幕は山鉾の木組が外から見えないように、構造の部分を隠す機能を果たすものである<sup>34</sup>。そして裾幕は、木組みを隠すという即物的機能とともに、その上に掛けられた懸装品を引き立てるといった視覚的機能も有している。換言すれば、裾幕は胴幕や水引と視覚的にぶつかり合ってはならず、あくまでもそれらを引き立てて、山鉾全体が一つの作品としておさまるようにすることが肝要なのである。選出されたデザインは、このような山鉾のトータルデザインという観点から見ると、難があるといえよう。

そこで、裾幕の色彩の明度や彩度を様々に変化させて、裾幕のデザインが突出しないような色彩計画を検討し、複数の修正案を制作した。例えば、白地に水色のモチーフ、水色地に青のモチーフ、紺地に水色のモチーフなどである(図19・20・21)。だが、これらの色彩計画を山鉾全体の意匠図に落とし込んでみたところ、これらの色彩の組み合わせは、上部の懸装品の色彩と今一つなじまないことが判明した。

このようにいろいろ苦慮するうちに、古い時代から今日まで引き継がれてきた裾幕の形式の一つである鯨幕が、ビジュアルデザイン教員の滝口洋子の念頭に浮かんだ。縦方向の線が強く表れる鯨幕の形式に、斜め方向の動きが強い草のモチーフを組み込んだら、斜め方向に向かう強い動きが少し抑えられるはずである。そのような方向で再構成していったのが、鯨幕状の修正案である(図22・23)。そして、これらの修正案をとりまとめて再度鷹山にプレゼンテーションしたところ、鷹山は鯨幕状の修正案を最終的に選択された。

(4) 現物モデルの制作に向けて  
次の作業として、鷹山の木部と複数の掛物がほぼ完成した

11月9日に、裾幕の原寸大のプリントアウトを実際の鷹山に配して、全体のバランスを確認しながら、京都市立芸術大学、鷹山保存会、平岡旗製造株式会社(裾幕の現物モデルを制作)の間でデザインの細部をつめていった(図24)。この現場には教員の滝口洋子、吉田雅子、日下部雅生とともに、デザインを案出した学生である小山内瑞恵も参加した。そしてデザインや仕様の細部を詰めて



図19 白地に水色の修正案



図20 水色地に青の修正案



図21 紺地に水色の修正案



図22 鯨幕にモチーフを組み込んだ修正案

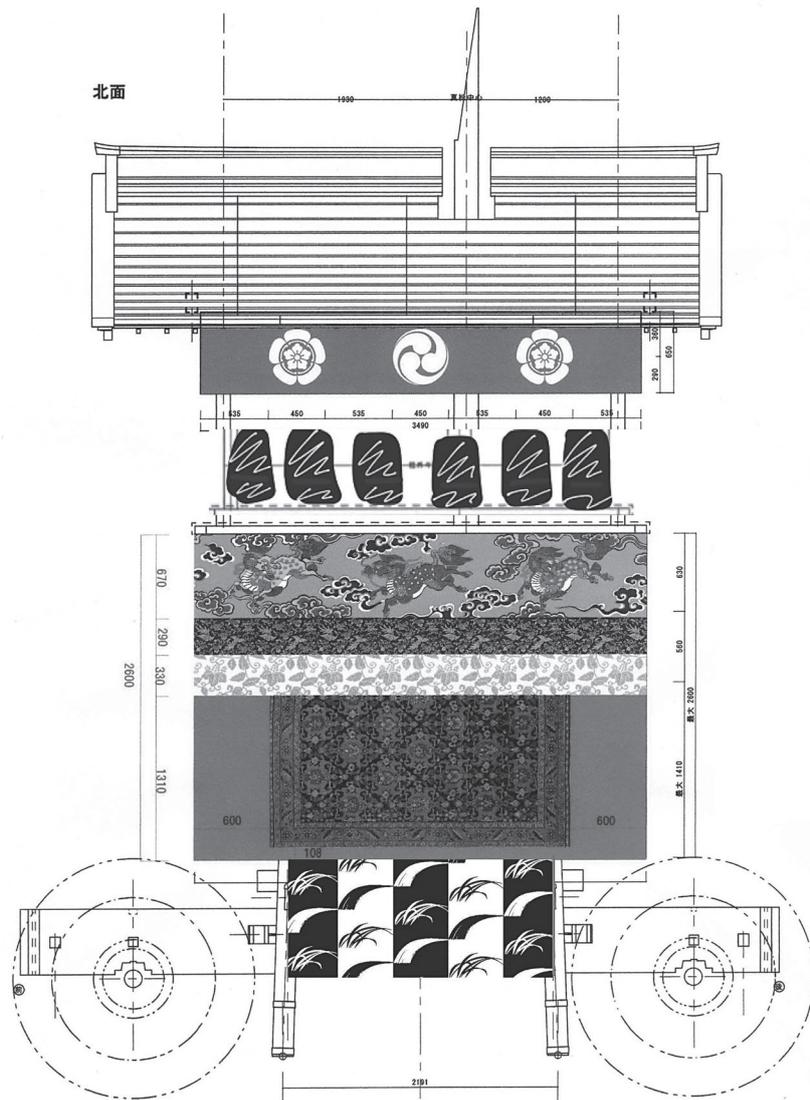


図23 鯨幕形式の修正案を鷹山に掛けた想定図



図24 鯨幕形式の修正案を実際の鷹山に掛けて検討する現場

いく過程で、染織教員の日下部雅生が色彩の選定に関して助言を行った。その結果以下の要件が決まり、現在はこれらの条件に従って現物モデルの制作に取りかかっている。

#### 左右につける裾幕

- ・鯨幕に草のモチーフを組み合わせる
- ・草のモチーフは、鷹山が前方に進んだ場合、草が後ろになびくように配す（草がなびく方向を左右で逆転させる）
- ・生地は麻の平織のさらしのもの、生地幅は43 - 44cm程度のものを探す
- ・生地は縦づかいにして縫製する
- ・裏地はつけない
- ・画面の大きさは高さ92cm幅204cmでデザインを出したが、実際に鷹山に掛けると幕がたるむため、それを見越してやや幅を大きめにする
- ・草のモチーフの大きさを少しだけ縮小する
- ・使用する色彩は紺色とし、赤みのある紺ではなく青みのある紺を用いる（二番水引の地色の紺色に合わせる）

#### 前後につける裾幕

- ・デザインは、鯨幕（縦縞）とし、草のモチーフは入れない
- ・生地、仕立て、色などは左右の裾幕に準ずる
- ・画面の大きさは当初は高さ40cm幅200cmでデザインを出したが、たるみ分を見込んで幅をやや大きめにする

#### おわりに

現在は平岡旗製造株式会社と打ち合わせを繰り返し、裾幕の実物モデル制作を進行中である。このサンプルは2022年3月末に仕上がり、京都市内の祇園祭ギャラリーにおいて後日展示される予定となっている。鷹山は2022年夏に、京都市立芸術大学の学生と教員が共同でデザインした裾幕をつけて、山鉾巡行への正式復帰にのぞむ次第となっている。さらに、2017年から5年間にわたり本学の学生と教員がこのプロジェクトでデザインしてきた音頭取り（山鉾の進行の合図を送る）、囃子方（山鉾に乗って囃子を奏でる）、車方（山鉾の進行を制御する）、曳き子（山鉾を曳く）、チャリン棒（山鉾を先導する）の衣装を身につけた人々が、この鷹山の歴史的巡行に花を添え、都大路を約200年ぶりに練り歩く予定となっている。

#### 註

1 年中行事絵巻に関しては、以下を参照。小松茂美編『日本

の絵巻8 年中行事絵巻』中央公論社、1987。

- 2 佐藤康宏『日本の美術』No.484 祭礼図、至文堂、2006、pp.24-25； 山中裕・武田恒夫編『近世風俗図譜』1巻、年中行事、小学館、1983、pp.56、118、119。
- 3 泉万里「月次祭礼図模本（東京国立博物館所蔵）について」『国華』1230号、1998；高岸輝「室町やまと絵のなかの月次祭礼図屏風」岩永てるみ等編『月次祭礼図屏風の復元と研究』思文閣出版、2020、pp.113-119。
- 4 昇山とは、担いで巡行する山。
- 5 佐藤康宏、2006、裏表紙の図； 山中・武田、1983、p.56、図30；河内将芳「月次祭礼図屏風に描かれた室町期の祇園会」岩永てるみ等編『月次祭礼図屏風の復元と研究』思文閣出版、2020、p.138。
- 6 胴幕とは、山鉾の胴の部分に掛けられる懸装品。
- 7 川嶋将生・辻惟雄編『近世風俗図譜』4巻、洛中洛外図2、小学館、1983、p.70。
- 8 林屋辰三郎・村重寧編『近世風俗図譜』3巻、洛中洛外図1、小学館、1983、p.93の図48。河内将芳『絵画史料が語る祇園祭』淡文社、2015、pp.97-98； 八反裕太郎『描かれた祇園祭』思文閣出版、2018、p.40。
- 9 佐藤、前掲書、2006、p.31； 八反、前掲書、2018、pp.295-327。本作の景観年代に関しては、研究者によってばらつきがある。
- 10 佐藤、前掲書、2006、表紙の図、p.35、図39； 河内、前掲書、2015、p.110、図48。
- 11 林屋・村重、前掲書、1983、p.12。
- 12 同書、p.91、図47。
- 13 同書、p.95、図49； 河内、前掲書、2015、p.104； 八反、前掲書、2018、p.46。
- 14 林屋・村重、前掲書、1983、p.94、図49。
- 15 赤井達郎・中島純司編『近世風俗図譜』8巻、祭礼1、1982、pp.36-37、図21。
- 16 八反、前掲書、2018、pp.447-475。
- 17 永田生慈総監修『横山華山展』日本経済新聞社、2018、212頁の次に挿入された折り込み図版を参照。
- 18 函谷鉾保存会編『天保の鉾』函谷鉾保存会、2006、pp.74-85。
- 19 八反、前掲書、2018、p.481。
- 20 同上。
- 21 祇園祭山鉾連合会編『放鷹：祇園祭鷹山復興のための基本設計』祇園祭山鉾連合会、2018、p.96。
- 22 曳山とは、中心に松などを立てる山のうち、山を曳いて巡行するものをいう。
- 23 祇園祭山鉾連合会編、前掲書、2018、pp.114-180。
- 24 同書、p.120
- 25 同書、p.114
- 26 八反、前掲書、2018、pp.383-421。
- 27 上田祥悟『蒔絵螺鈿の成立とその展開—平安時代を中心として—』京都市立芸術大学博士論文、第3章「東京国立博物館所蔵《片輪車蒔絵螺鈿手箱》について」2017。
- 28 前祭は17日に行われ、神が乗る神輿を八坂神社から市中の御旅所へ迎える。後祭は24日に行われ、神輿を御旅所から八坂神社に帰す。
- 29 京都祇園祭2019山鉾巡行（前祭）<https://www.youtube.com/watch?v=1cexBecpPV8>（2021年5月取得）より。
- 30 前祭23基：長刀鉾、蟻螂山、芦刈山、木賊山、函谷鉾、郭巨山、綾傘鉾、伯牙山、菊水鉾、油天神山、太子山、保昌山、鷄鉾、白楽天山、四条傘鉾、孟宗山、月鉾、山伏山、占出山、霞天神山、放下鉾、岩戸山、船鉾。後祭10基：橋弁慶山、北観音山、鯉山、八幡山、黒主山、南観音山、役行者山、浄妙

山、鈴鹿山、大船鉾。

- 31 鈴鹿山などは波の文様が比較的写實的に複雑に描かれており、このような例外も存在することを申し添えておく。
- 32 函谷鉾や北観音山の他に、霰天神山や綾傘鉾もこの例にあたる。
- 33 裾幕には複数の文様が組み合わされているものもあり、地色と文様の関係が2種類の場合がある。そのような事例は2つのもものとして別々に集計した。
- 34 裾幕の中には、丈を短めにして、縄結や木組を見せるものも一部ある。

#### 【図版出典】

下記以外の挿図は筆者か本学の学生が撮影または制作した。

- 図1 佐藤康宏『日本の美術』No.484 祭礼図、至文堂、2006、裏表紙の図。
- 図2 林屋辰三郎・村重寧編『近世風俗図譜』3巻、洛中洛外図1、小学館、1983、p.93の図48。
- 図3 佐藤、前掲書、2006、表紙の図。
- 図4 林屋・村重、前掲書、1983、p.95。
- 図5 同上、p.94。
- 図6 永田生慈総監修『横山華山展』日本経済新聞社、2018、212頁の次に挿入された折り込み図版。

図7 同上。

図8 ©京都国立博物館

図9 油天神山 京都祇園祭 2019 山鉾巡行（前祭）<https://www.youtube.com/watch?v=lcexBecpPV8>（2021年4月15日取得）。

図10 伯牙山 同上。

図11 蟻螂山 同上。

図12 船鉾 ©祇園祭山鉾連合会

図13 函谷鉾 ©祇園祭山鉾連合会

#### 【謝辞】

本プロジェクトにおいて以下の方々から御助言、御協力、御厚情を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。山田純司様、西村吉右衛門様、西村健吾様、木村幾次郎様、平岡昌高様、山口敬一様、大嶋博規様、上田公代様、村上忠喜様、安井雅恵様、山下絵美様、福持昌之様、今中崇文様。

#### 【附記】

本プロジェクトは日本学術振興会令和3年度科学研究費、基盤研究(c)課題番号19K00255を受けて遂行した。